異分子

ミント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異分子

【Ｎコード】
Ｎ９３１４Ｘ

【作者名】
ミント

【あらすじ】
異分子ーー彼女は世間の常識を破り、塗り替える。
何故男でなくてはならないのか？女に何が足りないっていうの？
主人公が可哀想過ぎるので、苦手な方はｂａｃｋでお願いします。
こちらは、コメディとかそういうのは少なくなると思います。ていうか、もうこれ悲劇です。

原作知らない、という方（と言っても、知ってる人いないと思います）はあらすじとか後々書こうと思っているので、そちらをどうぞ。

原作の説明（前書き）

原作の説明です。知名度が低い（特にエレニア記）ので。
ここで軽くネタバレ（原作部分だけ）します。
まぁ、でも一応見て置いた方が良いとは思いますが。

原作の説明

エレニア記
デイヴィッド・エディングス作
全６巻　眠れる女王
水晶の秘密
四つの騎士団
永遠の怪物
聖都への帰還
神々の約束

異世界にある、イオシア大陸にある国家のひとつ、エレニアが舞台。この国を保護するパンディオン騎士団に属する教会騎士スパーホークは、先王アルドレアスにより海峡をへだてて南にある砂漠の国レンドーに追放されていたが、アルドレアス没後、即位した女王エラナの命を受けて１０年ぶりに帰還する。

首都シミュラに戻った彼は、まだ１８歳のエラナが父王と同じ病気に倒れ、死に近づきつつあり、現在、パンディオン騎士団の聖騎士１２名と騎士団の教母セフレーニアが魔術で創りだしたクリスタルの中で、王冠をつけ玉座に座ったまま眠りについていることを知る。セフレーニアたち１３人は生命力が徐々に奪われ、月が一度公転するごと（＝２８日ごと）に一人ずつ死んでいき、最後のひとりであるセフレーニアが死んだ時、クリスタルは消滅し、エラナの命も失われるという。

エラナの擁護者であるスパーホークは彼女の病の治療法を探すため、仲間と協力してシミュラの司教アニアス、かつての仲間マーテル、魔術にたけた謎のスティリクム人といった様々な敵と戦い、襲いか

かるいくつもの謀略を破りながら、イオシア大陸中を旅する。やがて、その旅は神々の力を秘めた伝説の蒼い宝石『ベーリオン』をめぐるものとなり、神と人間の戦いへとつながってゆく。

Ｗｉｋｉｐｅｄｉａより抜粋

因みに、魔法と書きましたが、この世界中では『スティリクムの秘儀』と呼びます。

オルフェウスの窓
池田理代子作
全９巻

『オルフェウスの窓』は、２０世紀初頭のヨーロッパを背景に、第一次世界大戦やロシア革命といった史実を織り交ぜて、ドイツ・レーゲンスブルクの音楽学校で出会った3人の若者の運命を描く長編漫画である。物語は大別すると4部から構成され、その舞台もレーゲンスブルクからオーストリアのウィーン、ロシアのサンクト・ペテルブルク、またレーゲンスブルクへと変転する。

Ｗｉｋｉｐｅｄｉａより抜粋

主人公の（原作）ユリウスは、フォン・アーレンスマイヤ家の当主である父と、妾で先妻が亡くなったあと後妻としてアーレンスマイヤ家に迎えられた母を持つ。ただし、女でありながら、母　レナーテの野望と復讐心（レナーテはユリウスを身ごもると捨てられた）の為に男として育てられている。

「異分子」では、舞台はエレニア記、ストーリーと登場人物は両方
という感じでいきます。
オルフェウスの窓の都市、国は、
ドイツ→アーシウム
レーゲンスブルク→ラリウム（アーシウムの首都）
です。追い追い追加しますが。

原作の説明（後書き）

長かったですね。
ごめんなさい。

他に分からないことがあったらどんどん感想に書いて下さい。付け足します。

こんな訳で、これは《ファンタジー小説＋古ーい少女漫画》って感じのものです。

よろしくお願いします。

登場人物説明（前書き）

話が進むにつれて、どんどん追加していくつもりです。

登場人物説明

ルイザ：主人公。主人公のくせにまだ謎だらけ。１４歳。シリニック騎士団の下部組織（士官学校）の生徒。アブリエルの娘（養女）。キレると男のような口調になる。本気でキレると丁寧な物腰になるのは誰も知らない。

ベヴィエ：ルイザと同じ学年の士官学生。

アブリエル：ルイザの父親。娘を溺愛している。ドレゴス王は兄。１４人兄弟の下から2番目。王族だということは、公開されているにも関わらず殆ど知られていない。

ドレゴス王：ルイザ、ベヴィエ、アブリエル等々が暮らすアーシウム国の国王。アブリエルの兄。（＝ルイザの叔父）

プロローグに出てきた女の人：ルイザの本当の母親。（後でちゃんと出てくるのでお楽しみに～）

コリエル：アブリエルの直属の部下。アブリエルが騎士団長になった時に就任した。ルイザにとっては遠い親戚のような微妙な関係の人。

アリシア：ルイザの乳母。家族のような存在で、怒ると怖いので、アブリエルでさえ怖がっている。事実上のマルーン家の主人。

プロローグ

彼女は買い物を済ませ、店を出た。

（今頃おろおろしてるでしょうね）

家に置いて来た生まれて間もない娘と、夫のことを思って内心微笑む。

家の1本手前の通りを歩いていた時、悲鳴が聞こえた。

胸騒ぎがし、急いで家の前まで走る。

アパートの階段を登ろうとしたとき、強引に腕を掴まれ、通りを挟んで向かいの家に引きずり込まれる。

彼女を引きずり込んだのは、その家に住む小母さんだった。

「静かに。今、誰だか知らないけど、見かけたことがない人達がたくさんそこに入って行ったんだよ。武器を持ってーー」

そう言って小母さんが指差したのは、彼女の家だった。

（嘘でしょう？こんなに早く見つかるなんてーー）

何か柔らかい物に刃物が刺さる音がして、彼女が家の窓を反射的に見上げると、そこにはーー

赤い液体が付いていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

彼が報告を受けて向かったのは、街の外れにあるアパートだった。

数人の仲間と共に部屋に入ると、ありとあらゆるものが倒され、散

乱した部屋が目に入った。
さらに奥へ入ると、倒れている1人の男性がいた。彼の腹には剣が刺さっており、周りには夥しい出血の跡があった。

ごそり、と部屋の奥の方で音がし、彼らはびくりと反応した。音がした方向へわけ行って行くと、布で包まれている何かがあった。
1人が布の中を覗く。
「・・・！！生存者、発見。赤ん坊が・・・」
吐き捨てるように言った。

これが、彼女と養父の出会い。

プロローグ（後書き）

こんにちは・・・ｏｒ初めまして、ミントです。
今回は、（２作目なので当たり前ですが）初の２作品混合、他に同じ原作で書いている方がいらっしゃらない、という状態です。
原作自体知名度が超超超超超超超超低いので、もう１つの「四人の手練れ達」より必然的にアクセスが少なくなると思います。
でも良いんです。自己満足だもん！！
こっちは、思いついたら書くって感じなので、更新遅くなります。
１ヶ月あくこともあると思います。
ごめんなさい。
先に謝っておきます（苦笑）

この小説がきっかけで原作も読んで下さったら、とても嬉しいです。

第1章

「ベーリオンとは、薔薇の花の形に彫られたサファイア・ブルーの宝石のことだ。原始時代、サレシアのグエリグというトロールが彫ったと言われている。グエリグは、ベーリオンに様々な呪文を掛けた。しかしーー」

（・・・つまらない）
ルイザは欠伸をした。

「ちょっと」
隣に座っているベヴィエが小突いてくる。
「だって知ってることばっか。いくら昔から遡ってくるっていっても、伝説から始めることないだろ」
「・・・授業中だよ」
ベヴィエは諦めているようだったが、一応注意をしてくる。
「だって、ベーリオンなんてもうどこにあるか分からないんだろ？勉強する理由が分からない。こんなので時間とるより、実技の方に回してくれりゃあいいのに」
「いつか役に立つと思うよ」
「いつかっていつ？」
「・・・ベーリオンを探さなきゃいけなくなった時とか？」
「・・・馬鹿馬鹿しい。そんなことある訳無いだろ。今まで５００年間そんなこと無かったんだから」
ルイザは言った。

まさか、１０年後『いつか』が現実になるとは夢にも思わずに。

第1章（後書き）

さあ、やっと名前が出てきました（笑）
時間がある時にでも登場人物紹介書くつもりです。

さて、今回の話、おかしいなって思ったあなた、鋭いです。
主人公のルイザは、名前から分かる通り女。
話し方は、男。

この辺で予想つくとは思いますが、一応言っておきます。
アーレンスマイヤ君とは違う理由です。

では、ここら辺で。
さようなら。

第2章

「しっかし、本当お前って女みたいだよな？」
前に座っている上級生が振り向いて言う。
「あはは、昔からよく言われるんですよ。でも、ここは男子校ですから」
ルイザは答えた。
焦りを気付かれないように祈りながら。
（やっぱり、難しい・・・）
「こら、そこ。前向け」
先生に注意されて彼が前に向き直ると、ベヴィエが囁いた。
「もう少し気を付けなよ？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

何故女である彼女が男子校にいるのか。それは、数ヶ月前に遡る。

「ルイザ！！」
家に帰って来るなり、父親はルイザの部屋に駆け込んだ。
「！？」
父親は、暫く肩で息をしていたが、再び口を開くと言った。
「入学が・・・許可された」
「・・・ほんと？」
「本当だよ。さっき、校長先生から連絡が届い・・・っ！？」

ルイザは父親に抱きついた。
「ほんとね？ほんとなのね？」

校長室に入ると、校長と教師達がいた。
「こちらがルイザかね。結構結構。さっそく例の話に移ろうか。単刀直入に言う」

「男として通ってくれ」

第2章（後書き）

ほ。なんとか終わりました。
この話は、1ヶ月くらい前から考えてたので、以外とすらすら書けるんですよね。
ああ、この余裕が「四人の手練れ達」にまわせないものか・・・

ゴ：おーい

ああ、気にし過ぎて幻聴まで・・・

ゴ：幻聴じゃねぇっ！《ゴスッ》
　いつになったら更新するつもりだぁっ！

え？‘いつか’だけど？

ゴ：・・・あんまりサボるなよっ！

あ、行っちゃった。という訳で、「四人の手練れ達」も読んで下さったら幸いです（番宣かよっ）

ではでは～

第3章

ーー男として通ってくれ

それは、ルイザが二度ともとの生活に戻れないことを意味していた。
ここは、士官学校。
卒業試験に合格すれば、騎士見習いとしてシリニック教会騎士団に所属するようになる。
見習い期間が終了すれば、騎士として引退するまで過ごす。
その期間はーー人生の半分以上はーーずっと男として生きる。

ルイザは固まった。

（いくら何年もの間、待ち望んできたとしても、今までの生活を捨てるなんてーー）

固まったままのルイザが半分麻痺してしまっている脳味噌をフル回転させていると、隣に座った父、アブリエルが訊いた。
「何故そのような危険なことをする必要が？」
「簡単に言えば、世間体です。ここ、アーシウムには敬虔なエレネ教の信者が沢山いることはご存知でしょう？国教であるエレネ教の教会騎士団に女性がいると分かれば、国民の非難が国王であるドレゴス王に向くのは明らかです。それに、貴方の立場にも関係してくる。シリニック騎士団長であり、ましてやーー」
「私は自分の立場を気にするような人間ではない。娘を、人前に出すのが恥ずかしいほど甘やかして育てた憶えもない」
「でもーー」
「明日にでも国王に御相談に参ろうと思う。結果は後日。では。ル

イザ」

引き留める校長を無視するアブリエルに連れられてルイザは校長室を出た。

校長室の中からは、溜息が聞こえた。

第3章（後書き）

今回は、いろいろと設定の説明みたいなことを校長に喋らせてみました。
ちょっと無理があったかも、と今更冷や汗を流しているのは秘密です。

お父さんは、私のお気に入りです。
原作では、厳格な感じですが、「異分子」ではちょっと厳しいけど娘にデレデレな良いおとーさんになってもらおうとおもっちょります。

あと、登場人物説明も書きます。設定は少しずつ明らかにするつもりなので、ちょこちょこ手直し（付け足し）する予定です。

第4章

「ーー父さん？」

ルイザはおずおずとアブリエルに声を掛けた。

「馬を連れておいで。帰ろう」

返事をしてルイザが行ってしまうと、アブリエルは近くにあった石造りの階段を上った。

1つ上の階にある窓から街を見渡す。

アーシウムの首都であるラリウムは、昔から商業の街として栄えていた。学校と騎士本館の周りを囲む林の向こう側には、ラリウムの古くからの街並みが見える。複雑に入り組んだ石畳の道と、充分に余裕をもって建てられている色褪せた、落ち着いた赤の屋根の家々。その向こうには、城門とその向こうの王宮。白い大理石で造られた王宮は、大きくありながら質素な作りに見える。殆ど彫刻が施されていないためだろう。王宮なのに、という声は外国人からよく挙がる。だが、何しろ国民が敬虔なエレネ教信者なのだ。エレネ教では、不要な富、つまり有り余る程の財産は余り歓迎されるものではない。彫刻などしようものなら国民の不興を買ってしまう。それに何より、王族そのものが熱心なエレネ教信者なのだ。お陰で無駄は徹底的に省かれ、財政は潤っていた。

「父さん？何処？」

娘の声に我に返る。カツカツ、と階段を降りていく。

「帰ろうか」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「じゃあ行って来る。夕飯には間に合うようにするから」
次の日の午後、アブリエルはそう言って家を出て行った。

ルイザは、見送って父の姿が見えなくなると、自分の部屋に戻った。
「今まで隠し通して来たこれがやっと役に立つわ」
そう言ってルイザは男ものの服に着替えた。
外に出て厩に行く。
そこには彼女の馬が居た。
鞍を乗せ、跨り拍車をかける。家の門をくぐろうとした時、目の前に馬に跨った人が立ち塞がった。
「やれやれ。お父様に言いつけられて来てみれば」
その背の高い人影は、馬から降りてルイザの前に仁王立ちする。
ーーアブリエルの直属の部下、コリエルだ。
「こんにちは」
ルイザはにっこり笑って言った。
大概の人は声をかけるのを躊躇うであろう異様な雰囲気の彼に普通に話しかけられるのは、やっぱり慣れだろう。彼が初めてルイザに会ったのは、１０歳の頃だ。今からかれこれ４年前。
「これから出掛けるの。せっかく来て下さったのにおもてなし出来ないのが残念だわ」
「へぇ？何処に？」
どう考えても行き先は分かっているようだが。
「え？いつも通りよ？」
「いつも通りって？」
「・・・・・知らなかったのね？あたし、てっきり・・・」
「何処ですか？」
「ま、まぁ、また今度ね」
慌ててそう言って馬に拍車をかけると、ルイザは全速力で馬を走らせ、家を飛び出して行った。

「あ！ちょ・・・待て！」
コリエルも馬に飛び乗り、ルイザの後を追う。

ルイザが目指す所はただ1つ。

王宮だ。

第４章（後書き）

あー。ダメですね。
ごめんなさい。
変な所で終わらせちゃいました。
まぁ、そこは、作者の文才の無さという事でご勘弁を。
登場人物説明も投稿する・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・つもり。

第5章

「さよならーーーーーっ！！」

閑静な住宅街に一際大きな声と、馬の蹄の音が響き渡る。
そして、もう1つ。

「何がさよならだぁっ！待て、この野生動物！！」

「待つもんですか！」

2人はお互い馬に乗っている。
2頭の走る速度に変わりは無い。が、やがてコリエルの乗った馬が減速していく。乗っている人間の重量に相当な開きがあるからだ。

それを見てとったルイザは勝ち誇ったような笑みを浮かべ、角を曲がって姿を眩ました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

しばらくして、ルイザは王宮に着いた。
跳ね上げ橋を渡り、馬から降りて、馬を預ける。
「こんにちは。入ってもいいかしら？」
「こんにちは。どうぞ、お父様は先程いらっしゃいましたよ」
「ありがと」
顔見知りの門番に挨拶をして王宮に入る。

（何所から攻めても同じなら、正面突破に限るわ）
幼い頃から叩き込まれてきたことを思い出しながら、内心ほくそ笑む。
（まさか自分が教え込んだ事がこんな風に返って来るなんて思ってもみないでしょうね）

「こんにちは」
「こんにちは。お父様と国王陛下は何処に？」
王宮の召使いは殆どが知り合いなので、声を掛けてみる。
「御2人とも国王陛下のお部屋にいらっしゃいますよ？」
「ありがとう」
「あの、宜しければご案内致しましょうか？」
「ああ、大丈夫。分かるから」
召使いと話し終わると、ルイザは中に入った。太く長い廊下を歩き、迷わずにドレゴス王の部屋の前にたどり着く。
（久しぶりだったけど、なんとか着けて良かった）
扉の前で警護をしていた2人の騎士は、ルイザを見ると、たちまち相好を崩した。
「久しぶりだね、ルイザ。お父様なら中に・・・」
「ううん、お父様じゃ無いの。ただ、あたしが此処に来たのは秘密にしといてね？」
「分かった。じゃあな」
ルイザは、ドレゴス王の部屋のドアの隣の少し小さい方のドアを開けて中に入った。
内部は召使い用の通路になっている。これは、王の部屋の奥にある寝室にものを運ぶ時に使われる。
（確か・・・この辺だっけ？）
こつん、と指先で叩いて確かめ、耳を当てる。
この辺りは、壁が1番薄くなっており、大きな声なら聞こえる。それに加えて、ドレゴス王には、大きな声で話す癖がある。国王らし

い威厳を保つためらしい。
（ずっと馬鹿馬鹿しいと思ってたけど、今日はすごく都合が良い）
耳を当て、意識を集中させる。

「ーーーーからーーーーーーーーーーーー訳でーーーーーー」
「そういうことか。私は、ルイザには男として通って欲しいのが本音だ。ただーー」
「でもーーーーーーーーーーーーだからーーーーーーーーーーーー」
「ふむ。まぁ、好きな様にしなさい。私は構わない」
「ありがとうございます、国王陛下」
「アブリエル、国王陛下はやめてくれ。私も呼ばれ飽きた」
「？？」
「兄上とでも呼んでくれ。良いだろう？世界に１４人しかいない兄弟だ。私はそう呼んで欲しい」
「でも、兄上」
「あー、もう面倒臭い！命令だ、命令！」
「はい・・・兄上、私のこと、まだ子供だと思ってませんか？」
「当たり前だろう？１６歳も離れているんだ。今も赤ん坊に見えてもおかしくもなんともーー」

「ーーおい」

中の会話がそこまで意味を成さなくなったので、いい加減ルイザも飽きてきた頃、肩を掴まれた。
「あ・・・」
そこには、とても穏やかな笑みを浮かべたコリエルがいた。

第5章（後書き）

どうも。ご無沙汰してました、ミントです。
今回は、アブリエルの立ち位置を明らかにしたかっただけなんですけどね・・・ルイザ、健闘を祈るよ。

さて、この小説は、下書き一切無し！思いついたら書いてみよう！という、作者の暴走なのですが、この間気付きました。

下書きが無いと1章が短いっっっっっっ！！

いや、1話2話ってやって、後で章管理しよっかな～なんて思ってたら、どうやらｉＰｏｄには対応して無いっぽいんですよね。
という訳で、章が短え！と思った方、すみませんです。

第6章

今、ルイザはどっしりとした調度品で統一された部屋の中で立っていた。

目の前にいる男を睨め付けながら。

「そろそろその目はやめてくれ」

言葉とは裏腹に、愉しんでいる様に見えるのは、コリエル。

「なんで分かったのよ？」

「分かり切ってた事だろうが」

「あんた、相当卑怯だわ」

「どうとでも言え」

「まあ、いいわ。肝心の内容は聴けたから」

「何ぃぃぃぃぃぃ！？」

立場が逆転した今では今度はルイザがコリエルを弄ぶ番

「でも、ばらされたく無いだろう？」

ーーのはずだった。だが、ルイザは顔を引き攣らせていた。

「交換条件だ。黙っててやる。その代わり、此処に来た理由を吐いてその服を処分しろ」

「嫌だ」

「ーーそうか、仕方ない。じゃあ、お父上とアリシアさんにーー」

「分かった。その条件呑むわ」

ルイザは、アリシアのことを思ってこっそり溜息を吐いた。
アリシアは、ルイザが唯1人認めた、頭が上がらない人物だった。
アブリエルも厳しいが、彼は娘を愛する余りそれ程厳しく嗜めることは無かった。彼の妻が亡くなってからは特に。そんな中、ルイザの乳母であり、身辺の一切を取り仕切っているこの初老の女性は、彼女の義母の方針を変えず、彼女の秩序ある生活を保った。それ故ルイザから恐れられ、そしてそれ以上に愛されているのだった。

その言葉を聞いた瞬間、コリエルの口の端が片側だけ上がった。
それを見たルイザは、すぐに後悔をしたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「で？」
「で、ってどういうこと？」
「なんで盗み聴きなんかしたんだ？」
「ああ、それね。とにかく、自分のことなのに、勝手に人に決められるのが
嫌だったから、かな」
「生意気だな。まだお前は子供なんだから、当たり前だろ」
「親が決めるのは当たり前かもしれないけど、あたしの場合違うもの」
「サー・アブリエルに親権があるのは事実だ」
「だから、父さんは、あたしの養父でしょ？唯でさえあたしのせいで父さんは地位を落としたのに、大人になっても迷惑掛ける訳にはいかないから。自立出来る様になったら、家を出て行くつもり。これ以上迷惑は掛けられない」
「サー・アブリエルが認めるかどうか」
「認めなくても家出する。あたしの方が耐えられないの。もう・・・

お祖母様のときみたいなことは嫌なの」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「本当に良いの？」
紅茶が入ったカップをテーブルに置き、ルイザは訊ねた。

「どういうことだ？」
「さっきの話」

2人はルイザの家に帰り、紅茶を飲んでいる所だった。

「貴方はあたしが今日していたことを黙っておく、あたしは向こうにいた理由を話して男物の服を処分する。貴方の利が無いじゃない」
「そういうことか？」
コリエルは口の端を上げた。

「利が無いってことは、俺がばらす可能性が減ら無いってことだ。要するに、だ。俺は今後これを使ってお前を脅す」

「・・・貴方に1度でも感謝したあたしが馬鹿だったわ」
「忘れるな。俺は卑怯だぞ」
そう言ったコリエルは、乾いた笑い
声を残して立ち去った。

数日後、彼からの脅迫状がルイザの部屋で発見されたのはこれとは別の話。

第６章（後書き）

書き溜めたら、少しは長くなりました（＾＿＾）
次ぐらいで“現在”に戻って来れると思います・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・多分。

第7章

「何よこれっ！」

彼女がテーブルに叩きつけたのは白い封筒だった。
そして、その正面にはアブリエルが座っていた。
その手紙は、ルイザ宛てに今朝届いたものだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

結局、アブリエルが帰ってからの家族会議ーーといっても、ルイザとアブリエル、アリシアの極々こぢんまりしたものだったがーーの結果、ドレゴス王の言葉を楯にして、女であることを隠さず通うことに決まった。決まったはずだったのだが・・・

「今朝届いた手紙はこれとこれとこれと・・・」
「ああ、ありがとう。そこ置いておいて」

（！！）

「ルイザ、これはお前宛てだ」
「ありがとう、父さん」

（・・・・・・え？校長・・・先生・・・？）

ともかく、ルイザは封筒の口を破り、手紙を取り出して目を通した。

「っ・・・ふざけてやがる・・・！」

後から読んだアブリエルもショックを隠し切れてはいなかった。

『ルイザ・マルーン様

この度は本校に御転校を決められたそうで、私たち教職員も嬉しい限りでございます。

先日お話しした件ですが、昨日行われた会議の結果をここに書きます。

『ルイザ・マルーンは、性別を隠さない限り、本校聖（ザンクト）・ゼバスチアンには転入出来ないものとする。』

尚、この決議は、アーシウム国立エレネ教会の大司教の方々の会議の結果であり、覆すことは出来ないことを此処に記しておきます。

貴方に神の御加護がありますように

聖（ザンクト）・ゼバスチアン士官学校長』

読み終えたアブリエルは、手紙を破り捨てて、暖炉にくべた。

「・・・・・・それでも、行きたいのか？」

ルイザは、こくり、と頷いた。

目の前にいる男の目は、明らかに心配していて、やめろ、と警告しているにも関わらずーー

彼女は、真っ直ぐにその視線を受け止めて、それでも、尚、

ーー自分の夢を諦めなかった。いや、諦められなかった。

第7章（後書き）

やっと、やっと戻れる・・・・・・！

んっと、今回でルイザが男のふりしてる理由編（？）は終わりです。

えっと、ルイザの苗字ですが、マルーンは、色の名前から持ってきました。

Ｍａｒｏｏｎ・・・栗色。

見方によっては、血の色に見えます。

こっちのイメージでつけました。

この先血みどろになりそう、というかもう既に原作が原作なもので・・・ｏｒｚ

いきなりはそんなになさそうですけどね

お知らせ

おはこんばんちは、ミントです（古いっ汗汗　でも便利なんだもんっ）
えーと、「異分子」をよんで下さってありがとうございます。

さて、次の話は、ユニーク１００人突破記念で番外編と称してちょっとした話を載せようと思っています。
ただ、本編を読む際に邪魔だと思うので、２ヶ月経ったら消去するつもりです。
期間限定商品的な感じで（なんのこっちゃい）楽しんで頂ければ、と思っています。

因みに、このお知らせも、一緒に消去します。

では、まだまだ駄文を書くしか能のない私ですが、どうぞ生暖かい目で見てやって下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9314x/

異分子

2011年11月29日19時53分発行